



—中堅ゼネコンの経営環境は厳しい。

「大競争時代にあつて、大手は圧倒的な強さを誇り、地場ゼネコンは地域での役割がある。一方で、中堅の存在価値が薄れていくことが危ぐされるが、中でも当社は鉄道を核とした特色のある技術を持っている。それを道路などの交通インフラや狭い場所での施工を余儀なくされる都市土木に生かし、強みを発揮していく。強さに磨きをかけて、他社を引き離すくらいになりたい」

鹿島、JＲ東との3社連携強化

鉄建

—磨きをかけるための具体策は。

「昨年、千葉県成田市の技術センターをリニューアルした『建設技術総合セン

ター』で、徹底した社員教育を行っていく。『新・現場主義』を掲げ、余裕と生きがいを持って働けるような現場づくりにも取り組み

はしぐちのぶゆき
橋口 誠之氏



ター』で、徹底した社員教育を行っていく。『新・現場主義』を掲げ、余裕と生きがいを持って働けるような現場づくりにも取り組み

格とその他の要素が評価されるようにしてきた。発注者が意図する技術は何かを見定めて、プレゼンテーションをする能力も向上させる必要がある。一方、民間が主体の建築事業は、公共事業が縮小する中、当社にとっても重要な分野になる。ただ、マンション建築は採算が厳しいので、オフィス、工場、学校、老人保健施設など非住宅分野の比率を高め、採算性を重視した営業を展開したい」

「06年度に赤字決算となり、07年度は黒字を取り戻したが、まずは2年連続の黒字を達成することが目標だ。利益創出に特效薬はない。6月27日就任、東大工学部卒、神奈川県出身、61歳

「06年度に赤字決算となり、07年度は黒字を取り戻したが、まずは2年連続の黒字を達成することが目標だ。利益創出に特效薬はない。6月27日就任、東大工学部卒、神奈川県出身、61歳

「現場での事務作業をできるだけ減らし、OJT教育にも取り組めるようにする」

「土木、建築それぞれ

「鹿島、JＲ東日本との3社連携の今後の方針は。

「これまでの成果を検証する必要がある。それを踏まえ、連携体制を強化する方向性を探りたい。鹿島との間では、これまであまり進めてこなかった共同の技術開発に取り組みたい。JＲ東日本との関係では、当社がどれだけJＲに貢献できるかを再度考えていく必要があると思っている」。

「6月27日就任、東大工学部卒、神奈川県出身、61歳

新社長に聞く

鉄建社長に、東日本旅客鉄道（JR東日本）代表取締役副社長を務めた橋口誠之氏が就任した。鉄建の強みを「鉄道、交通、都市土木」と位置付ける。鉄道工事では定評のある同社だが、「他社に比べて首一つ出た現状では競争の時代を勝ち抜けない。水をあけた存在を目指す。技術を磨き、現場力を高める」と意気込む。今期の黒字確保に力を尽くしつつ、中長期的な経営戦略を固めていく考えだ。

——就任の抱負について

「大競争の中で、大手と地場の建設会社に挟まれた中堅ゼネコンとして、その存在価値が薄れてしまつたことを危惧（きん）している。あいさつ回りでは、特徴のある技術を持った会社としての期待感を顧客から感じた。」

独自の技術とともに、鉄道営業線の近接工事で安全に施工できるなどといった現場力を生かして期待にこたえていきたい」

——官公庁で総合評価方式の導入が進んでいる

「導入をチャンスととらえたが、残念ながら成果は思わしくない。ただ、エンジニアリング本部に各支店を支援する人員を配置したことなどもあり、感觸

だが、プレゼンテーション能力を磨く必要を感じている」

——建築分野は

「公共投資が減る中で、民間建築に力を入れていかざるを得ない状況にあるが、採算を重視する。採算が悪く、（販売不振で）仕事も減っている住宅の比

——海外事業の展望は

「国内の建設投資が伸びない中で重要だ。リスク対策としては進出地域を限定する。実績のある台湾やインドネシアを中心に、タイやベトナムなど周辺に広げる。鉄道中心に、トンネルなどの得意分野で展開する。こ

れまで売上の1割をめぐり海外に取り組んできたが、当面はこれを継続する」

——地方の仕事が減る中で支店や営業所の再編は

「仕事量に見合った再編は既に終えていると認識している。当面は現体制を維持する」



鉄建 橋口 誠之氏

——JR東日本と鹿島の3社連携の行方は

「見直しの時期と感じている。足りない部分を補い、強化する。鹿島とはプロジェクトで組むケースは多いが、技術開発での共同化は少ないと感じており、より活発化していきたい」

——中期経営計画（中計）の策定予定は

「中計に取り組みたい気持ちはあるが、先を読みにくい現状から年度単位で策定している。売上もまず1700億円規模を維持し、黒字化することを優先する。適切な売上規模はまだ見えてこない」

「大切なのは、短期的な競争でなく、長期的な競争を勝ち抜くことだ。そのためには信用、それを裏打ちする技術が重要になる。2年連続の黒字を確実に達成し、会社に弾みをつけた。まず今年度が勝負ととらえ、全力を尽くす」

技術磨き現場力高める

は良くなっている」

「発注者が何を評価してくれらるのかに知恵を絞る。応札結果のデータベースを研究する。総合評価に強い同業他社から学ぶことも多い。安全と品質は絶対強化する」

率を下げ、オフィスや工場、学校などの非住宅を高める。営業の人員もシフトさせる。合わせて、不動産市況が悪化する中で、地道に情報を集め、与信管理を強化する」

記者の目

質問には一呼吸置き、丁寧な言葉で答へ、みんなの声にじっくり耳を傾け、奇をてらわず、安定感のある判断を下す。就任時に社員には「厳しい

時代を粘り強く頑張ってくれている」と真っ先に感謝の気持ちを伝えた。その上で「厳しい時代はまだ続くが、明るく、楽しく苦勞しよう」と呼び掛けた。人材に対する思いは人一倍強い。今後の施策でも、社員教育ややりがいのある職場づくりを重視する。「当社の財産」と呼ぶ人材を一つに束ね、特徴のある専門家を築くことを目指す。

（はしぐち・のぶゆき）1969年3月東大工学部卒後、日本国有鉄道に入社。96年6月東日本旅客鉄道取締役盛岡支社長、2000年6月常務仙台支社長、02年6月常務鉄道事業本部副本部長、04年6月代表取締役副社長兼鉄道事業本部長などを経て、08年6月から現職。趣味はテニス、スキー、囲碁。神奈川県出身。47年3月10日生まれ、61歳。

新社長に聞く

6月に、東日本旅客鉄道代表取締役副社長から、鉄建代表取締役社長執行役員社長に就任。技術開発と既存技術のブラッシュアップを進め、顧客の更なる信用確保、また、安全に対する取り組みへの一層注力などが重要と指摘する。今後の事業展開などについて聞いた。

※ ※
就任の抱負
建設業界は嵐の中にあると言え、そのような状況においては、特徴を持ち、存在価値を發揮しなければならぬ。当社は、鉄道交通インフラ工事、都市土木工事等に関して特徴のある様々な技術を保有している。今後、技術開発と保有技術のブラッ

安全確保の取組注力

シニアアップにより、他社の追随を許さない技術力の強化を図り、顧客の更なる信用確保に繋げる。併せて安全の取り組みに一層注力する。

短期的ではなく、中長期的な競争に勝ち残ることが大事。そのためにも信用と技術、安全が重要となる。

事業展開
展開の1つとして、公共事業の減少が続いていることもあり、民間建築に力を入れる。その中でも、オフィス、学校など非住宅分野のウエイトを増やしたい。営業戦略としては、より採算性を重視する。

総合評価方式への対応では、これまでの結果を分析するとともに、プレ

はしぐちのぶゆき 氏 誠之 橋口 建 鉄



センターション能力の向上などを通じて、受注に繋げる。

海外事業は、国内の状況が厳しい中で重要ではあるが、様々なリスクがある。そこで、これまで実績のある台湾、インドネシアのほか、周辺のタイやベトナムに注力したい。

安全確保・技術強化
鉄道工事従事者の安全の意識向上と技術力の強化のため、昨年11月に成田市に建設技術総合センターを開所した。センターでの取り組みなどの他、研修月間などを通じて、安全確保と技術強化を進めている。

安全確保に関しては、

【略歴】 69年3月東京大学工学部卒業、同年4月日本国有鉄道入社。92年5月東日本旅客鉄道厚生部長、96年6月取締役盛岡支社長、98年6月取締役建設工事部長、00年6月常務取締役仙台支社長、02年6月常務取締役鉄道事業本部副本部長、04年6月代表取締役副社長鉄道事業本部部長、07年6月代表取締役副社長鉄道事業本部部長兼建設工事部担当、08年6月鉄建代表取締役社長執行役員社長に就任。趣味は、テニス、スキー、囲碁。神奈川県出身、61歳。

強化していきたいと考えている。

他、情報センターを通じて、人員配置や現場支援強化した情報の共有化による「新・現場主義」の推進している。有給休暇の計画的取得制度等を導入しているほか、組織的な現場OJTの強化などに取り組んでいる。

新・現場主義
様々な施策を進めるに当たっては、余裕ある現場体制の構築が必要である。現場に対する適切な

技術強化し、更なる信用確保

まで頑張ってきた皆さんに期待しているというメッセージを発信した。